

◎ これからの「性の健康」 ジェンダー・セクシュアリティをチームで守る

石内 崇勝

一般社団法人天照会 いだてんクリニック

「性の健康」は、性感染症の検査・治療・予防に限られるものではなく、身体、こころ、ジェンダー、セクシュアリティ、妊娠・避妊、将来の生活設計を含む幅広い健康課題である。性は、出生時に割り当てられた性（sex assigned at birth）、性自認（gender identity）、性表現（gender expression）、性的指向（sexual orientation）や性対象など複数の要素から成り立ち、必ずしも男性・女性の二分法だけでは捉えられない。こうした多様な性のあり方を前提に、本人が自認する性や望む身体感覚、生活のあり方に近づけるよう支える包括的な医療が Gender Affirming Care である。

いだてんクリニックでは、ジェンダー外来を通じて、診断前の相談から診断後の治療相談、戸籍変更に関する相談、性別適合手術／性別肯定手術（gender-affirming surgery：GAS）に関する情報提供、妊活や将来子どもを持つ可能性に関する相談まで、幅広い診療を行っている。ホルモン療法では、本人が望む性のあり方や身体変化、身体状況、生活背景を丁寧に確認し、複数の製剤を選択肢として提示しながら、身体的・心理的・社会的側面を含めた全人的な医療を展開している。また、すでに自己輸入などでホルモン製剤を使用している人に対しても、治療の可否を一方的に判断するのではなく、ホルモン値の測定、副作用の確認、血栓症・多血症・肝機能障害などのリスク評価を行う「ホルモン見守り診療」を実施し、健康被害の予防に努めている。

当院のジェンダー外来の特徴は、ホルモン療法だけにとどまらない点にある。生活習慣病の管理、健康診断などを含むヘルスケアに加え、human immunodeficiency virus（ヒト免疫不全ウイルス：HIV）を含む性感染症検査・治療・予防、ワクチン、避妊、月経や妊孕性に関する相談などのセクシュアルヘルスケアを、同一施設内で一元的に提供している。

Gender Affirming Care は医師だけで完結する医療ではない。受付での呼称や名前の扱い、看護師による問診や検査説明、検査・会計・情報管理における秘匿性への配慮など、さまざまな医療スタッフの理解と連携によって、安心して受診できる環境が成立する。本発表では、いだてんクリニックにおけるジェンダー外来の実践を紹介し、これからの「性の健康」をジェンダーとセクシュアリティの両面からチームで支える医療のあり方について考察する。

〈略歴〉

2016 年大阪大学医学部医学科卒業。熊本大学ヒトレトロウイルス学共同研究センター所属、一般社団法人天照会代表。脳神経外科専門医、日本定位・機能神経外科学会技術認定医、日本エイズ学会認定医。

社団法人として公共性・公益性を重視し、需要と供給に乖離のある医療を中心に行ういだてんクリニックを設立。HIV-PrEP や性病予防薬をはじめとして、ジェンダー外来も関西に実装し、ジェンダー・アイデンティティを包括した「性の健康」に関する全人的な医療の社会実装を行っている。熊本大学、エイズ治療・研究開発センター、大阪大学医学部感染症内科、滋賀医科大学精神保健看護学と共同でよりよいセクシュアルヘルスケアの臨床、研究、教育を行っている。

◎ 単著者と話そう

トランスジェンダーを生きる体験の「質感」と医療・心理支援

町田奈緒士
奈良女子大学

本講演では、拙著『トランスジェンダーを生きる一語り合いから描く体験の「質感」』の内容をもとに、トランスジェンダーを生きるという体験を、個人の内面にある固定的な性質のものとしてではなく、他者との関係性のなかで立ち上がるものとして捉え直す視点について論じる。

性別不合やジェンダー・アイデンティティをめぐる医療・心理支援においては、性はしばしば、本人の内面にある自己認識や、診断・支援の対象として理解される。しかし、トランスジェンダーの人々の語りに耳を澄ませると、性は自己決定される属性であるだけでなく、他者からどのように見られ、呼ばれ、扱われるかという関係のなかで、身体感覚や実感を伴いながら体験されていることが見えてくる。

本書では、このような体験を捉えるために、語り合い法と対話的な自己エスノグラフィを用いながら、性を〈雰囲気〉として、トランスジェンダーを生きる体験に伴われる諸実感の背後にある存在様式を〈擬態〉として、そして安心して生きるために必要な他者や言語的資源を〈器〉として記述した。そこから浮かび上がるのは、トランスジェンダーの人々の苦悩が、身体や自己認識の問題に還元できるものではなく、性別二元論的・シスジェンダー主義・異性愛主義的なまなざしのもとで、自分の振る舞いや存在の仕方を絶えず吟味させられる関係的な体験であるという点である。

医療・心理支援において必要なのは、トランスジェンダーに関する「正しい知識」を持つことだけではない。目の前の人が、どのようなまなざしのなかで自分を経験してきたのか、そしてその人の〈雰囲気〉がどのように受け止められうるのかを、ともに感じ考える姿勢が求められる。本講演では、トランスジェンダーの人々の体験の「質感」を手がかりに、彼らに対する医療・心理支援において、当事者の体験をどのように了解し、関わるのかを考えた。

〈略歴〉

奈良女子大学大学院人文科学系専任講師。京都大学 大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。博士（人間・環境学）。専門はジェンダー心理学（クィア心理学）、臨床心理学。トランスジェンダー／LGBTQ+の体験と心理支援、ジェンダー・セクシュアリティをめぐる心理臨床のあり方について研究している。主な業績として、『トランスジェンダーを生きる：語り合いから描く体験の「質感」』ミネルヴァ書房（2022年）、『からだは語る：身体性とジェンダーの精神分析』（第4・5章監修）木立の文庫（2025年）など。

社会に埋没する「息づくものたち」を描く

濱田 香（筆名：濱田アキ）

ことのか書房

性や生の世界（つまり社会全体）では、確実に存在しているはずなのに目には見えないものたちがいる。たとえば生きづらさを持つものである。人生の答え探しが癖になっている少女。答えは見つからない。そのうち深い自己嫌悪に陥り、生きている感覚が薄くなって行く（『ジュエルっ子物語』）。また、たとえば性別の囚われから逃れられないものである。同性の恋人が性別変更をしたため婚姻して「夫婦」となる。周りから祝福を受け、楽で穏やかな社会生活を送るが、それは自分の性指向を無視した上に成り立っている。それは自分というものを失ったような激しい危機感を生む（『完璧夫婦の城』）。また、死に関することもある。家族が孤独死をした。遺体は激しく損傷している。遺体に対面せずに火葬する。悲しみよりも「遺体を見たかった」という気持ちがいつまでも消えない。世の中の弔いや癒しのプロセスに当てはまらないものがここに在る（『弔い返し』）。

ひとり出版社・ことのか書房のコンセプトは「息づくもの、香り立つ」である。人間が本当の意味で生きるということに向き合い、社会が存在をなかったことにし得るものたちを、不用意な光を当てるのではなく、まるで「香り立つ」ように言語化し、その存在を意識できるようにする。そのような文芸作品を提供したいと思っている。

〈略歴〉

1971 年 香川県生まれ

2026 年 3 月 京都芸術大学大学院 芸術研究科（通信教育）文芸領域 修士課程修了

2026 年 4 月 ことのか書房 立ち上げ

◎著書

絵本『ジュエルっ子物語』（お話担当）（2022 年、幻冬舎刊）

小説『完璧夫婦の城』（2023 年、GalaxyBooks 刊）

小説『弔い返し』（2026 年、ことのか書房刊）

本報告の目的は、トランスジェンダー生徒が学校生活で直面する困難は社会的にもたらされ、その解決も社会的におこなわれることを、トランスジェンダーの若者の語りから明らかにすることである。

文部科学省が2015年に示した「性同一性障害に係る児童生徒に対する学校における支援の事例」の項目は、同時にトランスジェンダー生徒が学校生活で直面する困難の事例ととらえることができる。それらの事例の多くは学校自身がおこなう「性別にもとづく扱いの差異」である。「性別にもとづく扱いの差異」は、2つの性別カテゴリーに分化した結果なされるだけでなく、2つの性別カテゴリーを構築する。性別カテゴリーの構築は学校段階ごとに異なる形を見せる（木村 1999）。この性別カテゴリーの構築を「性別分化」と呼ぶことにする。性別分化の過程で、子どもたちは出生時に割り当てられた性別にしたがった「正常な位置」へと自らを位置づけるとともに、他の子どもたちに対しても強制力を働かせる（西舩 1998）。この強制力を「出生時に割り当てられた性別へと水路づける強制力」と呼ぶことにする。

トランスジェンダー生徒は「出生時に割り当てられた性別の強制力に従わなければならない」という現実と「自らの性自認にしたがった性別で学校生活を送りたい」という欲求の間で葛藤を起こす存在ととらえることができる。この葛藤を「ジェンダー葛藤」と呼ぶことにする（土肥 2025）。

当日は土肥（2025）を執筆する際用いたインタビューデータを使用し、ジェンダー葛藤が強まる過程と軽減する実践を紹介する。

<文献>

土肥いつき, 2025, 『トランスジェンダー生徒と学校 「抱えさせられる」 困難と性別移行をめぐる実践』生活書院。

木村涼子, 1999, 『学校文化とジェンダー』勁草書房。

西舩容子, 1998, 「『ジェンダーと学校教育』研究の視点転換——ポスト構造主義的展開へ」『教育社会学研究』62。

<略歴>

京都府立高校教員（教科は数学）。関西大学人権問題研究室非常勤研究員。

現職教員の傍ら、2012年から2015年まで京都教育大学大学院教育学研究科に在籍、2015年に修士（教育学）取得。2015年から2021年まで大阪府立大学人間社会学研究科博士後期課程に在籍、2021年に博士（人間科学）取得。

単著に博士論文を書籍化した『トランスジェンダー生徒と学校 「抱えさせられる」 困難と性別移行をめぐる実践』（生活書院）、共著に『インクルーシブな教育と社会』（ミネルヴァ書房）や『学校音楽文化論』（東信堂）などがある。また、日本性教育協会の『現代性教育研究ジャーナル』にも2009年から2024年まで連載を担当。